

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 エリック クリストファー シッケタンツ

本論文は十九世紀末から二十世紀初頭における日本と中国の間の仏教交流を扱い、中国人仏教者がどのように近代的な宗教観を獲得するに至ったのか、今日まで日本と中国の双方で一般的になっている仏教観がどのように成立したのかを明らかにすることを通して、近代における宗教運動・思想がそれぞれ国内の政治・社会的な制約に条件づけられながら、同時に国際的な刺激をうけて展開するダイナミズムを追究したものである。序論、第1～4章、結論、それに文献リストからなる。

序章において、本論文の基本的な視点が示されたあと、第1章では当時の中国仏教を墮落、衰退とみなした日本人仏教者のまなざしを取り上げられる。中国仏教を墮落していると一般化することは、実は、日本仏教には仏教本来の精神が保存されており、従って啓蒙と近代化の担い手であるべきだとする自負と表裏一体であったことが、中国を訪問した日本人の言説の分析を通して明らかにされる。第2章では中国人仏教者の墮落言説が扱われ、それが伝統的な末法思想を継承しつつも、近代中国に対する危機感と仏教改革への指向性を表す、一種のレトリックとして機能していたことが明らかにされる。第3章では、この墮落言説において重要な機能を果たした「宗派」という概念が扱われる。かつて唐代に存在した(とされる)宗派が存在しないことが、日本人仏教者が中国仏教は墮落していると判断したときの重要な根拠であった。しかし、日本的な意味での「宗派」は中国仏教にはもともと存在していなかったものであり、逆に日本との交流を通して中国人仏教者も宗派概念を内面化していき、仏教復興は即ち宗派の復興であるという観念を帰結することになった。換言するなら、宗教は他から明瞭に区別される団体として存在するという近代的な宗教観念を、中国人仏教者は日本を媒介に吸収したのであり、仏教は諸宗派の併存として存在するという、今日でも一般的な仏教観はこの時に成立したのである。第4章では、この宗派概念に基づく実際の運動として、1920年代頃に始まる密教復興運動が取り上げられる。この運動は日本の真言宗の影響を受けていたため、仏教改革を進めた太虚により批判されるが、その対立の焦点は男性僧侶中心の教団秩序を守るか、女性を含めた在家者にも宗教的権威を認めるかという点であったことが明らかにされる。つまり、中国人仏教者は日本的な宗派概念を主体的に摂取し、それぞれの目的のために活用したのであって、単に受動的に影響を受けたわけではない。

本論文は楊文会、太虚、王弘願などを始めとした多くの中国人仏教者の言説を丹念に分析し、近代中国仏教を日中交流の視点から明らかにする独創的な内容になっている。もとより中国仏教における宗派の性格については更なる考察が必要であり、また引用文献の解釈に検討を要する点はあるが、近年の欧米における宗教研究理論にも目配りしており、中国仏教のみならず、日本仏教研究においてもその価値は高いと評価できる。よって審査委員会は博士(文学)を授与するのに値するものと判定した。